



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



第1回普通選挙の結果は、どうなったか

1928(昭和3)年2月20日、「普通選挙法」による最初の衆議院議員を選ぶ総選挙が行われた。貧しい労働者や農民が尊い1票を投ずる日がようやくきたのである。

この総選挙でもっとも注目されたのは、無産政党と呼ばれる社会主義的な政党が、どれだけの票と当選者を獲得するかであった。

ときの田中義一政友会内閣は、内務大臣の鈴木喜三郎のもとで、警察を使ってはげしい選挙干渉を行い、無産政党の演説会は、しばしば警察官によって中止を命令された。とくに、無産政党のなか

	総得票数	候補者数	当選者	落選者
立憲政友会	4,244,384	342	217	125
立憲民政党	4,256,010	342	216	126
実業同志会	166,250	31	4	27
革新党	81,324	15	3	12
無産政党	462,288	82	8	74
中立・その他	655,939	153	18	135
合計	9,866,195	965	466	499
有権者総数	12,538,196			
投票率	78.69 %			
前回有権者総数	3,343,673			

資料出所: 家永三郎編『日本の歴史 6』ほるぷ出版 1984年 p.156
 原典は、遠山茂樹・安達淑子『近代日本政治史必携』
 原典には投票率の欄はないが、倉橋が計算した。

でも、もっとも強く政府に反対する立場をとっていた労農党の大山郁夫委員長などは、10分以上しゃべれることはほとんどなく、ひどいときには、「諸君」といっただけで、警察官から「弁士中止」がかかったことさえあったと、当時の婦人運動員の1人がその思い出を書いている(『大山郁夫伝』)。警察官は、1900(明治33)年にできた「治安警察法」の第8条や第10条により、集会の解散や演説の中止を命令する権利をもっていたのである(※普通選挙法と同時に成立した治安維持法とは別の法律)。

だから、大山委員長のばあい、ほとんど運動らしい運動ができず、それでもし当選できるならば、琴平神宮の石の鳥居でも当選できるだろうなどといわれていた。ほかの無産政党の候補者も、みな似たような妨害に会い、同じ労農党の山本宣治は、氏名をなのっただけで中止を命じられたという。

こうして投票日がやってきた。開票の結果は、政府与党の政友会が217議席、野党の民政党が216議席で、ほぼひとしい勢力となった。注目の無産政党は、立候補者82人のうち8人が当選した。

無産政党の当選は、少数であった。しかし、日本の議会の歴史のうえで、はじめて、労働者と農民の立場に立った衆議院議員が現れたのである。466議席のうち8議席というその比率の意義は大きかった。(家永三郎編『日本の歴史 6』ほるぷ出版 1984年p. 155より)